問題児たちと青年が異世界に来るそうですよ？

伊達　マイム

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少女を庇って死んでしまった森野叡士だったが、その少女が地球を救ったおかげで異世界転生!?その少女も箱庭に!?

そんなわけでチート使って楽しいチートライフ！

※初投稿です。暖かい目でお読みください。

目次

オリキャラ設定（生きている者限定）　1
原作開始前
事の始まり　12
二人が出逢うまで　21
英雄の終わりと始まり　31
ＹＥＳ！黒ウサギが呼びました！
ファーストコンタクト　45
偽りの魔女　63
星読みの魔女　75

オリキャラ設定（生きている者限定）

オリキャラの設定（主人公やその周辺の人物）

・森野　叡士（もりの　えいじ）　ＣＶ（島崎信長）
年齢　１７歳
誕生日　４月１０日
身長　１７７ｃｍ
体重　６２ｋｇ
家族　父（故人）、母（故人）、妹
好きなもの　セツノ、華夜、子ども、甘いもの、面白いこと
嫌いなもの　辛いもの、外道な奴、セツノを傷つけた奴
容姿　ＳＡＯのキリトを茶髪にしてアホ毛がついた感じ
ギフト
「言語取得能力（ユ ジッ ク）」
これは、文字通り言語取得のギフトで、聞いた言語を取得する。一度聞くと、その

言語の情報が一気に頭の中に流れ込んで、定着する。要するに、使える様になるのだ。影分身を使ってバイトしていたため、主要な言語はもちろん猫や犬などの人以外の言葉も分かる。

「書き換え能力（リライト）」

これは、Ｒｅｗｒｉｔｅの主人公、天王寺琥太郎が持っているギフトである。原作とは違ってデメリットのを寿命（いのち）使うことが無く、ガチのチート化した。

「完全記憶能力（シュパイサー）」

これは、文字通り見たものを記憶し定着するギフトである。主人公は　　このギフトを使って学校のテストでオール満点を出した事がある。さらに全国模試でも満点を出してしまって、カンニング疑惑をかけられた事がある。そのとき、個室で模試のときとは違うテストで満点を出した事により、カンニング疑惑は晴れた。ということがあった。

「忍術マスター」

これは、ＮＡＲＵＴＯに出てくる忍術、技術が全て使える様になるギフトである。

主人公は特に影分身を好んで使っていた。しかし、デメリットはそのままで、さらに『眼』を使った忍術は使えない。具体的には、『写輪眼』、『白眼』、『輪廻眼』、そして『転生眼』を使った忍術は使えないのだ。しかし、書き換え能力（リライト）を使って『眼』を完成させた。

「武闘マスター」

これは、ドラゴンボールの技が全て使えるようになるギフトである。主人公はよく武空術を使っている。そのとき、人工衛星や戦闘機のレーダーに映らないように書き換え能力（リライト）と変身（フォルムチェンジ）の合わせ技でステルス能力をゲットして飛んでいる。

「覇気（アンビティオ）」

これは、ＯＮＥＰＩＥＣＥの覇気が使えるようになるギフトである。武装色。見聞色、覇王色の３つあり、能力はそのままである。分からない人はググってね。

「変身（フォルムチェンジ）」

これは、Ｎｏ．１～Ｎｏ．８０２のポケモンに変身できるギフトである。そして、変身したポケモンが覚える技全てを使える。

「略奪」

これは、Ｃｈａｒｌｏｔｔｅの主人公が持っているギフトである。このギフトはギフトを略奪するギフトである。原作では相手から奪った能力は使えるようになり、相手は使えなくなる。そして、デメリットとして能力以外の記憶が徐々に消えていくというデメリットがある。しかし、この作品では、奪ったギフトの相手は使えるようになり、デメリットはなくなった。だが、原作開始前の時点で主人公は一度も使ったことの無いギフトである。

「フェアリーマジック」

これは、ＦＡＩＲＹＴＡＩＬの魔法の全てが使えるようになるギフトである。デメリットを無くして、デメリットを受け無くても使える魔法になった。さらに、書き換え（リライト）能力を使って呪法の下位互換の魔法を使えるようになった。

「令呪」

これは、サーヴァントを3回まで命令できるギフトである。だが、主人公とセツノは箱庭に来るまで全く気付いていなかった。そのため、ギフトカードを見て初めて気が

付いた。

「??」

これは、十歳のときに出現したもので詳細な部分については何も分かっていないギフトである。この作品が進むにつれて分かっていく。

概要　この作品の主人公。のんきだが、しっかり者。トラックに轢かれそうだった少女を助けてそのままトラックに轢かれ死んだ。しかし、助けた少女が地球を救ったおかげで転生することになった。実は前世でかなりのチートの適応者だったのだが、本人は覚えていない。なぜなら、トラックに轢かれたとき、適応者としてネフと戦った記憶が失ってしまったのだ。

転生した世界ではユグドラシルに貰ったギフトで施設のためにバイトなどして荒稼ぎしていた。その金額は億を超える額だ。そのため、いろんなスキルが上達した。さらに、暗躍して北〇鮮のミサイルなどを迎撃していた。セツノのことが好きである。妹の華夜のことも好きであるが、シスコンというわけではない。

・セツノ・ハイサヒン（静謐のハサン）　　ＣＶ（千本木彩花）

年齢　１６歳
誕生日　２月８日
身長　１６１ｃｍ　（ＦＧＯ調べ）
体重　４２ｋｍｇ　（ＦＧＯ調べ）
スリーサイズ　Ｂ８２：Ｄ　Ｗ５６　Ｈ６３
家族　父（故人）、母（故人）
好きなもの　叡士、華夜、子ども、甘いもの、可愛いもの
嫌いなもの　外道な人物、ゴキブリ、苦いもの
容姿　静謐のハサンの毒々しさが抜けた感じ
ギフト
「妄想毒身（バザーニーヤ）」
これは、静謐のハサンの宝具である。詳細はＦＧＯで。
「気配遮断Ａ＋」
これは、文字通り気配を消すギフトである。

「毒の娘」

これは、静謐のハサンの基になった説話がギフトになったものである。自身の全てが毒となる。それは、切り替えが可能である。使っているとき、全身に紫色のエフェクトがかかる。

概要　サーヴァントになる前、暗殺教団の教主「山の翁」を務めた歴代のハサン・サッバーハの1人であり「静謐のハサン」の異名を有した毒殺の名手。恋人や婚約者といった関係を暗殺対象者と結ぶ事も多かった。　つまり、成就しない「擬似的な幸せ」を自らの手で構築しながら自らの手で奪う、という行為を繰り返し続けたのである。徐々に、彼女の精神は軋んでいった。　最期は、将軍がふと目を離した隙に何者かの手で斬殺されていたと言われている。

転生した世界では、毒の制御に成功し、大いに喜んだ。そして、愛しい人と一緒にいられる幸せをかみしめた。要するに、主人公大好きっ娘である。さらには、どじっ娘である。

・森野　華夜（もりの　かよ）　ＣＶ（茅野愛衣）

年齢　９歳
誕生日　８月４日
身長　１３６ｃｍ
体重　秘密
家族　父（故人）、母（故人）、兄
好きなもの　叡士、セツノ、甘いもの、勉強、走ること
嫌いなもの　ゴキブリ、苦いもの（特にピーマン）、大声で話す人、外道な人

容姿　魔法科高校の劣等生の北山雫を幼くして、髪を茶髪にしてアホ毛がついた感じ。

能力
「精霊の王（キングオブスピリット）」
この能力は全ての精霊の長を使役することができる能力である。

※使役している精霊
風の精霊シルフィード　（♀）
木の精霊ドリアード　（♀）

土の精霊ドノーム　（♂）
雷の精霊イリア　（♀）
水の精霊ウィンディーネ（♀）
火の精霊イフリート　（♀）
光の精霊フェイリス　（♀）
闇の精霊スプリガン　（♂）
無の精霊マスクウェル　（♂）

概要　主人公の妹。勉強は叡士に教えてもらって好きになった。既に某K高校卒業レベルの知識を持つ天才である。希望の丘園で経理を担当していたが、一度として間違えることはなかった。まぁ、分かるとは思うけど、作者はラストエンブリオに登場させる気満々である。天真爛漫な性格で知らない人でも仲良くなれる。ブラコン。

・絃世来架（いとせ　らいか）　ＣＶ（日笠陽子）

年齢　１５歳
誕生日　１１月１日
身長　１５３ｓｍ
体重　秘密
スリーサイズ　Ｂ９２：Ｇ　Ｗ６２　Ｈ７７
家族　父、母
好きなもの　辛いもの、スポーツ、歌、料理
嫌いなもの　ネフ、外道な人、酸っぱいもの
容姿　ノゲラのステフを銀髪にした感じ
ギフト
「四属性黒魔法（エレメントマジック）」
これは雷、水、風、土の四属性の黒魔法を使ことができるギフトである。第１位階～第１０位階まであり、数が大きくなると威力が高くなる。

概要　この作品のオリキャラ。箱庭に来る前はネフという地球外生命体と戦っていた。そして、ネフに勝ち、地球を救った英雄となった。しかし、「英雄」という肩書きの代わりに共に戦っていた仲間を失った。本人の意識に反してなってし

まった英雄である。しかし、実際の彼女は猪突猛進タイプの人間で一度決めたことは曲げない芯の強い娘なのだ。そして、結構ズボラだったりする。

原作開始前
事の始まり

俺はいつの間にか知らない場所にいた。真っ白い空間だ。
「ここは、どこだ?何でこんな場所にいるんだ?」
よし、まずは落ち着こう。俺は・・・死んだはずだ。トラックに轢かれそうだった少女をかばって死んだはずだ。ということは、ここは神様の部屋とかそういう類の部屋なのか?などと自問自答を繰り返していたらなんか目の前に爺さんが現れた。
・・・なんか胡散臭い爺さんだな。
「胡散臭いとはなんじゃ!わしは神じゃ!」
「っ!」
考えを読まれた!?
「それは、わしが神だからな」
「なるほどな」

「すぐに納得したな」
「そりゃあ思考を読まれたら納得するだろ」
「それもそうか。ところで、今、お主はどういう状態なのか分かってはおるかの？」
「ああ、死んだんだろ？あ、そうだ。あの少女はどうなったんだ？」
「気になるのか？」
「もちろん」
当たり前だ。最後に助けようとした人だからな。
「あの少女は生きているぞ。なぜなら、あの少女を助けたおかげでお主はここにいるのだからな」
「・・・どういうことだ？」
「実はな、あの少女は地球を救ったんじゃ」
「ち、地球を!?」
「ああ、そうじゃ。お主があの少女を助けなかったら地球は無くなっていたんじゃ。だから、少女を救ってくれたおぬしは地球を救った者と同じとし、転生をする権利を与えられたんじゃ」
「そうか・・・。ん？待てよ？転生!?俺は転生するんだな!?」
「そうじゃ」

よっしゃー!!異世界転生だ!!チートし放題じゃねえか!!!
「そうじゃ」
「特典はいくつまで大丈夫なんだ?」
「１０個までじゃ」
「いいのか?」
「いいんじゃよ。これでもまだ足りないくらいじゃ。さらに、転生時の身体能力は全て最強クラスじゃ。」
「・・・マジ?」
「マジじゃ」
「そうなのか。なら、
1. すべての言語がわかる能力
2. Ｒｅｗｒｉｔｅの「書き換え能力（デメリット無し）」
3. 完全記憶能力
4. ＮＡＲＵＴＯのすべての忍術・技術
5. ドラドンボールのすべての技
6. ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥの覇気
7. アローラ地方までのポケモンに変身する能力

８．Ｃｈａｒｌｏｔｔｅの「略奪（デメリット無し）」
９．Ｆａｔｅ／Ｇｒａｎｄ　Ｏｒｄｅｒの「静謐のハサン」
１０．ＦＡＩＲＹ　ＴＡＩＬのすべての魔法（デメリット無し）

でいいか？」

俺が言うのも何なんだが、すげーチートだな。

「分かったのじゃ。ただし、略奪の効果を原作通りの効果ではないようにする。まあ、能力そのものは奪われないようにするだけなんだがの。そうしないと、神の掟に反してしまうからの」

「わかった。あ、そうだ。なあ、静謐のハサンの毒を効かないようにすることはできるのか？」

「召喚した時にする予定じゃよ。そうではないと死んでしまうではないか」

よかった。確かにそうだもんな。

「あと、ここで召喚して一緒に小さくしてくれないか？それと、能力を体に馴染ませるために、１０年ほど修行できないだろうか？」

「わかった。そうすうようにしよう。ところで、転生する場所はどうするのじゃ？」

「じゃあ、『問題児たちが異世界から来るそうですよ？』の世界で」

「わかったのじゃ。では召喚しようかの」
そう言って指を鳴らした。するとボンッという音が聞こえて、煙の中から静謐のハサンが出てきた。
「サーヴァント、アサシン、静謐のハサン、参上。すべて、すべて、貴方の御心のままに。私はすべてを捧げます。この体も。この心も、すべて・・・・・・・」
俺は彼女がセリフを言い終えた後、抱き着いた。
「マ、マスター!?」
とすぐに離して、彼女は困惑し、悲しんで後悔した。
（またマスターを殺してしまった・・・）
ん？何でそんなに悲しそうな顔をしているんだ？あっそうか、俺が死んだと思っているのか。
「大丈夫だよ。俺は死んでないよ」
「ふぇ？えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!?え！だって！私、毒があるのに！どうして!?」
「落ち着いて、俺は君の毒が効かないんだ」
「う、嘘です！そんなことあるはずない！いままで誰ひとりとしていなかったのに！」
「だとしても俺には効かない。これは事実だ」
何とか説明して納得してもらえた。

「そうですか。あなたを信じます。・・・その、それで、もう一回ぎゅーッってしてもいいですか?その、気持ちよかったので」
「ああ、いいよ。」ギュー
と言いながら俺は、彼女の髪を撫でた。
「・・・／／／」
可愛いぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ!!!!
や、やばい。可愛すぎ!可愛い!可愛い!可愛い!可愛い!
・・・・・・・・・・・・・・うん、何言ってんだ俺。
まあ、でも結婚したいくらいかわいいからなあ」
「・・・」ボンッ
顔を茹でたタコみたいに真っ赤にした後、耐えきれなかったのか気絶した。
「ど、どうした!?大丈夫か!?」
サーヴァントなのに、簡単に気絶しちゃったよ。・・・本当に大丈夫か?
「大丈夫な訳がないじゃろ。お主、心の声が漏れて告白紛いの言葉を口にしてたからの」
「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?・・・・・・・・どのあたりからだ?」
「〝まあ、でも〟のあたりからじゃな」

「マジか・・・」
一番聞かれちゃまずい言葉を聞かれた！
「ウ、ウ～ン」
「お、気づいたか」
さっきの出来事は忘れててくれ！
「あ、マスター」
「大丈夫だったか？」
「はい。マスター。しかし、記憶が混濁して、マスターは私の毒が効かないというところまでは覚えているのですが、私はどうなったのですか？」
「君から抱き着いて、自ら抱き着いたことに気が付いて、恥ずかしさのあまり、気絶したんだよ」
「えっ・・・／／／」
「おっほん。そろそろいいかの」
「お、そうだった。そうだった。１０年の修行だろ？」
「そうじゃ。わしら神が相手になってやろう」
「マジで！ありがとう！」
「そう言えばわしの名前を言ってなかったな。わしの名前は、ユグドラシルじゃ」

「・・・・・・は?ユグドラシルって世界樹だろ?何で人の形をしてるんだ?」
「それわの、わしは元々オーディン殿の馬じゃったのだが、オーディン殿の計らいで世界樹にさせてもらったのじゃ。すると、わしに、神と同等以上の力を持てるようになっていろんな形になることができるようになったからじゃ。それに、この姿じゃと人間に神だと分かってもらえるのじゃ」
「そうなのか。俺も名前を言ってなかったな。俺の名は森野叡士だ。よろしく」
「よろしくなのじゃ」
「わ、わたしもよろしくお願いします」
「転生したら、そやつには別の名で生きることになるからの」
「・・・・はあ!?」

＊＊＊＊

あれから１０年がたった。能力の使い方をマスターするのは５年程で出来た。残りの５年は勉強や静謐ちゃんとイチャイチャしたり、神たちと騒いだりしていた。

「そうだ。ユグドラシル、そろそろ行きことにするよ」
「そうか・・・わかったのじゃ」
「ほかの髪によろしく伝えておいてくれ。」
「あ、そうだ。静謐ちゃんの名前はどうなるんだ?・」
実はまだそのことについて話してもらっていなかったのだ。
「・・・わかったのじゃ。特別に教えてやろう」
ジジイ話す気なかったな?
「ハサンの名前はーーーーーじゃ。そして、能力などはそのままじゃ。」
「ありがとう」
「では、転生しようかの」
「エイジ、間に合いました。一緒に行きましょう」
「おう!そうだな」
「はああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
と同時に魔法陣が浮かび上がって俺と静謐ちゃんは消えた。

二人が出逢うまで

ｌｓａｉｄ　ｅｉｊｉ　ｏｎｌ

目が覚めたら赤ちゃんになっていた。今の状態に少し驚いたけど、転生ってのはこんな感じなのかと思った。そして、考えた。ユグドラシルの話なら、静謐ちゃんと早く会いたいけど、まだその時じゃない。時が来たら会いに行こう。

＊＊＊＊１０年後＊＊＊＊

俺は今十歳になった。これまでにいろんなことがあった。まず、家族が１人増えた。六歳下の妹ができたのだ。名前は森野華夜で俺の可愛い妹だ。次に、時間までまだ早いけど、転生した静謐ちゃんと連絡を取ろうと思って念話を使ったけど、反応が無かった。どうやら、魔法の範囲外のようだ。少し残念だったけど、やっぱりまだ早いようだ。

そして、俺の能力が１つ増えていたことだ。これは、本当に驚いた。その能力はよく分からなかった。この前、

１度その能力が発動したんだが、後は何をしてもうんともすんとも言わない。その時は高熱で意識が朦朧としていてよく覚えて無かったんだ。まあ、誰もいなかったのはよ

かったかな。誰かに見つかったら何をされるかわかったもんじゃないしな。と思っていたのだが、妹に見られてました。終わったなと思っていたけど、逆に喜んでいた。まだ幼いからよく分からないけどすごいと思っているのかなと考えたけど、そうではないらしい。実は妹にも能力があってそれを隠していたらしい。その話を聞いて、ラストエンブリオに俺の妹が出てくるのかと思った。それは置いとくとして、能力を見せてもらった。なんと、精霊を通じて魔法を放っていた。その時に見せてもらった魔法はメルトダウンという魔法である。精霊の名前がシルフィードで風の精霊であると言われた。

精霊には属性が９つあり、基本的な風、火、雷、土、水、木。相互関係にある光と闇。そして、弱点と有効な属性がない無属性の９属性である。また、シルフィードは風の精霊の中で一番上の精霊らしい。さらに妹は、すべての属性を使役していると言う。それぞれ、火の精霊イフリート、雷の精霊イリア、土の精霊ドノーム、水の精霊ウィンディーネ、木の精霊ドリアード、光の精霊フェイリス、闇の精霊スプリガン、無の精霊マスクウェルである。そして、すべてその属性の一番上の精霊であると説明した。

俺はその説明を聞いて、ご都合主義ありがとうございます！って言いたくなった。まあ十六夜よりチートの俺の妹が弱いわけがないと思っていたからそこまで驚きはしなかったけど、既に十六夜の足元並みに強いってところは驚いた。

＊＊＊＊＊２年後＊＊＊＊＊

両親が死んだ。当時は俺が修学旅行中でいなくて、妹も友達の家にお泊まりで家には両親しかいなかった。その夜家が燃えた。放火だった。犯人は捕まらず、事件は迷宮入りになってしまった。お通夜の時両親が死んだ後に初めて妹は泣いた。さっきまであんなに元気だった妹が親の死を実感して泣いたのだ。俺も柄にもなく泣いていた。後で知ったのだが、父さんが外交官で人に恨みを買われていたらしい。

俺たちは親戚たちにたらい回されて結局、施設に入ることになった。その施設に名前は、「希望の丘園」。

「ここが新しく俺たち兄妹の家になる場所か」

「そうだね！お兄ちゃん！」

そう言いながら、叡士に抱き着いた。

「おう。じゃあ、まずは荷物を置きに行くか」

「うん」

「とまあ部屋に荷物を置いたわけだが、どうする華夜、俺は園長さんのところに行くけ

ど」

「ここの子たちと遊びに行く！」

そう言って部屋を飛び出していった。さてと、そろそろ園長に会いに行きますかねと思いながら、部屋を出ようとしたとき見知った気配を感じた。そして、俺にぶつかり、そのまま抱き着いた。

「ただいま」

と身を離して笑顔で言った。彼女は泣きながら笑顔でこう言った。

「おかえりなさい」

ｌｓａｉｄ　ｅｉｊｉ　ｏｆｆｌ

―ｓａｉｄ　???　ｏｎｌ

私が目覚めたとき赤ちゃんの姿になっていた。

「（ええええええええ!!）おぎぎぎゃゃゃあああぁぁぁ!!おぎぎぎゃゃゃあああぁぁぁ!!」

「あらあら、元気な赤ちゃんね。この子の親はどうして捨てることができるのでしょう？ねえ、ミスター」
「そうだな。本当に許せないよ。どんな事情があるのか分からないけれど、子供を捨てるっていう所業をする親のハラワタを燃やしたい気分だよ本当に」
「ええ、本当に。あ、そうだわミスター。児童養護施設を立ち上げましょうよ。皆さんと一緒に」
「作るか。施設を」
こうして「希望の丘園」ができた。

＊＊＊＊12年後＊＊＊＊

あれから十二年の歳月が経った。いろんなことが起こった。まず、私に家族が増えた。私からしてみれば十分子供なのだけれども、実年齢より大きい子どもたちと小さな子どもたちと一緒に暮らすようになった。次に、この世界のがどういう世界なのかということが分かった。この世界は一見普通の世界だけど、偶に能力を持った子どもが生まれてくる世界だった。しかし、能力を持ったまま生まれた子どもは世間から拒絶されているという世界だった。

そして、私の毒の効果が切り替えが可能になったこと。それが分かったとき、声を上げて喜んだ。それと同時にエイジがいない寂しさが心に来た。その日の夜

「寂しいよ。エイジィ」

と呟き、深い意識の中に堕ちた。

ある日、この園に新たな子どもが来た。兄妹で兄は私と同い年らしい。どんな子なんだろう?と思いながら洗濯物を干していた。

「仲良くなれるといいな」

そんなことを言いながら、作業をしているとあの人の気配を感じた。

「っ!」

まさかと思いながらも体はその気配に向かってかけていた。

「(あの人が――――――エイジが来てくれたの!?)」

そして、その人に抱き着いた。その人は私からその身を離して

「ただいま」

と笑顔で言った。

(ああ、やっぱり私、静謐のハサンもといセツノ・ハイサヒンはエイジのことが好きで

す。）

と感極まって泣いていたけれど、笑顔を見せなくちゃと思い、泣きながら笑顔で言った。

「おかえりなさい」

ｌｓａｉｄ　ｓｅｔｓｕｎｏ　ｏｆｆｌ

ｌｓａｉｄ　ｅｉｊｉ　ｏｎｌ

その日の夢の中でユグドラシルに会った。

「再会できたようじゃの」

「おう。ってかあんときに場所も教えて欲しかったよ」

「分かっとらんのう。そんなことをすればせっかくの感動が水の泡になってしまうではないか」

「んなこと言うけどよ、まさか福岡にいるとは思わないだろ？千葉との距離が１００００ｋｍ以上離れてるからな。道理で念話がかからないと思った」

「まあそう言うではない。グッときたろう？」

「まあな」
「お、照れてるのう。照れてるのう」
ウ、ウゼェ
みたいなことをしてたら、時間がきた。
「そろそろお主が覚める時間じゃの」
「そうか。もう時間か」
「そう悲観することではない。また会えるじゃろうて」
「分かった。またな」
「またなのじゃ」
すると、意識が遠くなっていった。気が付くと朝になっていた。目の前には静謐ちゃんもといセツノと華夜がいた。
「あ、起きたんですね。エイジ、おはようございます」
「おはよう。セツノ」
「お兄ちゃん！おはよ！」
「おはよう。華夜」

＊＊＊＊5年後＊＊＊＊

俺とセツノは十七歳になった。もうすぐ原作が始まると思うとワクワクする。ワクワクし過ぎて妹に引かれている。

「もうすぐだ。ク～っなんかくるものがあるな」

とつぶやいていたら、突然、どこからともなく手紙が降って来た。それと同時にセツノが部屋に来た。

「エイジ！突然空から手紙が降って来ました。これは、どういうことですか？」

「ほら、前に言った箱庭の世界への招待状だよ」

「あそこですか。分かりました。いきましょう！」

「華夜には悪いけど、もうちょい待っててくれよ。・・・じゃあ、行くか」

「はい」

と言って、手紙を開いた。

『悩み多し異才をもつ少年少女に告げる。その才能（ギフト）を試すことを望むのであれば、己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、この〝箱庭〟に来られたし』

そして、二人が消えた。

ああ、そっか４０００ｍのひもなしバンジーをさせられるんだ。見渡すと自分たち以外の人間が四人と猫が一匹いることに気づく。

ん？四人？でも、面白そうだ。

「っしゃあ！」

「ヤハハ」

「わっ」

「きゃ！」

「えっ!?」

「はい？」

と六人と一匹は箱庭に現れた。

英雄の終わりと始まり

―ｓａｉｄ　ｒａｉｋａ（ｓｙｏｕｊｏ）　ｏｎ―

私、絃世来架（いとせらいか）はいま、４０００?からパラシュート無しのスカイダイビングをしている。突然で何言ってんだこいつと言いたくなるのは分かるが、事実だ。あの変な手紙を読んだらこうなった。まあ、飛ばされたことはあったから、大丈夫だと思う。それに、あの手紙に書かれていることが確かなら、ほかにもいるはず。そう思って辺りを見回すと驚くことが分かった。なんと、私を助けて死んだ人がいるではありませんか。驚きすぎて、

「えっ!?」

って言っちゃったよ!でもその人は気づいていない様子でした。まあ、流石にその人本人じゃないと思うし、似てる人だと思う。でも、あの人に助けられてから、私の人生はそこから変わったな。

＊＊＊＊＊6年前＊＊＊＊＊

その日は私の十歳の誕生日だった。私の家では毎年ママがケーキを焼いてくれるので、私はとても楽しみにしてたんだ。私は楽しみで学校が終わったら、走って家に帰ってたけど、途中で信号に捉まった。まあ、でもいっかって思って信号を飛び出した。そうしたら、猛スピードで迫ってくるトラックがやってきた。私は怖くて身体が固まった。

（動いて！動いてよ！）

強く思い込んでも足がすくんで動かない。

（ああ、もう駄目なのね）

諦めていた時、声が聞こえた。

「危ない!!」

その声と同時に私は突き飛ばされた。そして、私は死んだように気絶した。気絶するときに見えたのは、誰かが血を流して倒れているところと男の人が電話しながら叫んでいるところ、そして、女の人が私に駆け寄ってくるところでした。

私は気が付いた。

「ここは・・・」

「あら、きづいたのね。ここはね、病院よ」

「病院・・・。あ、あの、私はどうして「その話は先生とママを呼んで来るからちょっと待っててね」・・・分かりました」

しばらくして、先生と看護師さんとママがやって来た。

「来架！来架！来架ぁぁぁ!!」

「えっ!?ママ!?」

「ちょっとお母さん！ここは病院ですのでお静かに願います！」

泣きながら言い寄って来るママ。あまりのことにオロオロする私。ママを注意する看護師さん。というあまりにもカオスなことになった。何とかママをなだめていると、刑事さんがやって来て私に今回の事件のことを話してくれた。話し終わった後、私は助けてくれた人がどうなっているかを聞いた。すると、その刑事さんは苦虫を噛み潰したような顔をして黙ってしまった。子どもの私でも分かる。私を助けてくれた人はもういないのだと。私は罪悪感の中で押しつぶされる感覚だった。

「ら、来架、あなたは悪くないの。これは、不幸な事故なのよ。だからね、・・・・・」

ママが何か言っているけど、私は何も入ってこなくて途中から何を言っているか分からなかった。私の精神は深い海の中に沈んでいった。気が付いたら、朝になっていた。あの後の事は覚えていない。後でママや先生に聞いたら、私があの後気絶したので、退院してから改めて事情聴取を行う事になったらしい。そして、退院して事情聴取を行ってから2週間がたった。

私は今、宇宙人のような人ではない何かと戦っている。周りの人たちには見えていないように結界を施している。

「はぁぁぁぁぁ!!」

「グオオオオオオ！」

「消えて無くなれ！」

そう言って私は放った。

「フールミネ!!」

「ギャァァァァ!!」

人ではない何かは黒い煙になって消えた。

「ふぅ～。終わった～」

この二週間でこれで１４回目だ。要は、１日１回襲われている。そして、今使ったのは黒魔法第２位階雷の魔【フールミネ】である。なぜそのようなものが見えたり使えた

りするのか。それは、あの人に助けられた後、突然見えるようになっていた。一番最初に襲われたときは人気のない路地裏で事情聴取の翌日だった。その時は、助けてもらったのに私の命がなくなっていくのかなって諦めていた。しかし、運命は動いた。私とあまり年が変わらない少年がやって来てその正体不明の何かを消滅させた。その何かは黒い煙になった消えた。私はテンパっていた。なぜなら、その少年は私の幼馴染だった。

「は、遥翔?!」

「あ、来架。大丈夫だった?」

この眼鏡をかけた少年は幼馴染の桜井遥翔(さくらいはると)。私と同い年で、マイペースな性格である。

「だ、大丈夫なわけないでしょ!こ、殺されるところだったのよ!というかあれは何なのよ!」

「ま、まぁまぁ落ち着いて。まずは深呼吸。深呼吸」

言われるまま、深呼吸をした。

「ス〜、ハ〜」

「どう?落ち着いた?」

「ありがとう。落ち着いたよ。で、まずは、あれは何だったの?」

「あれはね、〈Ｎｏｎ（ノン） Ｅｓｔ（エスト） Ｈｏｍｏ（ホモー）〉。ラテン語で『人ではない者』。通称〈ＮＥＨ〉、〈ネフ〉と呼ばれる宇宙からの侵略者だ。それｄ「ちょっと待って。えっ！どゆこと？宇宙？侵略者？」はいはい。まだ話の途中だからもうちょっと待っててね。」

目が笑ってなかった。

「ごめんなさい」

私はすぐに謝った。

「よろしい。じゃあ、続きを話すね。それで、その〈ネフ〉を倒すために僕らの組織が戦っているんだ。そして、僕らの組織の名は〈Ｓｐｅｒｏ（スペーロ）〉。ラテン語で〈希望〉を表す言葉なんだ。」

「そ、それで？私は記憶を消されるの？」

「うーん。本当はそうしなきゃいけないんだけど、こっちに来る？」

「きょ、拒否権は」

「あるお思う？」

「で、ですよね～」

そして、私はアジトに連行された。

◆◆◆◆

スペーロのアジトに着いた。驚いたことに、遥翔の部屋のクローゼットに転送装置がついていて、そこからアジトに行けるようになっていた。
「やあみんな。ただいま」
「「「おかえり！」」」
四人が言いながらやって来た。
「遥翔、スペーロの人たちって五人しかいないの？」
「いいや、ここはスペーロの日本支部だよ。人数は僕をあわせて六人。本部はアメリカにあるんだ。それで、スペーロの人数は約２０００人いるんだ」
「どうやって現地まで行くの？」
「来架がさっき使った転送装置を使って行くんだよ。転送するところを変えれば、日本中どこでも行けるからね」
「そうなんだ！」
「そろそろよろしいやろうか」
「あ、うん。そうだね。みなさんのことを来架に紹介しないとね」

「うん。でも、まずは私からやるよ。私の名前は紘世来架。十歳です。遥翔の幼馴染です。よろしくお願いします。」

「ほんなら、まずは、うちからやるわ。うちの名前は霧島朱莉。十五歳や。ここのリーダーをしとんねん。ほんで能力は〈時間操作〉や。要するに、時間操作ちゅーっことやな。よろしゅうな。あ、後でうちらが呼んどる能力についての説明をするから、ちょーっと待っとってな」

「じゃあ、次はオレの番だな。オレの名は透柄尚弥だ。年は十六。そして、能力は〈再　生〉。何でも再生することができる。例えば、人なら、死ななければ、どんなケガでも治せる。物なら、散り散りにならなければ、直せる。まあ、要するに、ケガをしたなら、オレに任せろってことだな。長くなったがまあよろしく。」

「次はボクの番だね。ボクの名前は、永瀬鏡花。鏡花って呼んでね。十三歳で能力は〈反　射〉だよ。文字通り反射することができるんだ。来架ちゃんよろしくね！」

「あたしの番だね。あたしは不知火焔華。年は十八。能力は〈煌焔の罪〉。簡単に言えば焔使いだよ。これからよろしくね。」

「これで全員ですか？」

「ちゃうで～。イスカ。」

霧島さんが呼ぶとすぐに機械の音声が聞こえてきた。

〈ハイ。アカリサン。キョウハドンナゴヨウデスカ？〉
「新しい子ぉに挨拶や」
〈ワカリマシタ。ワタシハイスカ。スペーロニホンシブセンヨウＡＩデス。イゴオミシリオキヲ〉
「私の名前は絃世来架。よろしくね。イスカ」
「そういえば、イスカあんたのところのマスターはんはどうしたん？」
〈マスターハイマシュウシンチュウデス。マスターヲオコシニマイリマショウカ？〉
「お願いするわ～」
〈オマカセクダサイ〉
と言った後、声が聞こえなくなった。

＊＊＊＊１０分後＊＊＊＊

白衣を着た男の人が現れた。

「やあ！諸君。おはよう。それで、新しい適応者君はどこかな？」

「ヒィ！」
私は小さな悲鳴を上げて遥翔の後ろに回り込んだ。いや、だって怖いよ！目が血走った状態で探しているんだよ!?
例えると、うしおととらの白面の者を思い出してください。知らない人はググってね。
いや、あなた誰よ！
作者です。
メタいわね。
問題児(お前)がそれ言う!?まあいいや。
閑話休題(話を戻そう)

焔華さんがその変質者(人物)にチョップした。
「痛っ！痛いじゃないか焔華」
「小さな子どもを怖がらせるんじゃないよ。威兎(かいと)」
「えぇ！怖がらせてたのか。」
私を見つけて、優しく自己紹介をしてきた。

「ごめんね。僕は稲葉威兎（いなばかいと）。二十歳だよ。僕は本部から送られてきたエンジニアなんだ。後、焔華の幼馴染でもあるんだ。よろしくね」
「私は紘世来架です。よろしくお願いします」
そのまま焔華さんを見た。
「そうだよ。こいつの幼馴染だよ」
「へぇ～」
「なんだい」
「何でもないですよ～。あ、適応者ってどういうことですか？」
「じゃあ僕が説明するね。実はここに来るときに言ったことは嘘なんだ」
「記憶を消すってやつ？」
「うん。それでね。本当は来架が適応者になったからなんだ」
「それってもしかして――――――ネフが見えたから？」
「お！正解。ネフが見えることは能力が使えるってことなんだ」
「なるほどね。それで適応者ってわけなのね」
「そういうこと」
「それで、何をすればいいの？」
「髪の毛１本で能力が分かるんだ」

「分かった」
髪の毛を稲葉さんに渡した。
「よし！じゃあ鑑定しようじゃないか！」
「「「「うざい！」」」」」
「え～。ま、いいや。能力が分かったら、伝えるよ」
自室にもどっていった。
しばらくしたら、戻ってきた。
「来架ちゃんの能力が分かったよ」
「私の能力は？」
「能力の名前は〈四属性黒魔法（エレメントマジック）〉文字通り雷、水、風、土の四属性の魔法を操ることができる能力だ」
「チートみたいな能力だな」
「使い方を見誤らないようにしないと」
「そうやな。うちや尚弥ほどじゃないにせよ能力のコントロールは必要やな」
「私、頑張ります！」

＊＊＊＊

あの日から5年は過ぎた。彼女はネフの大本を倒し、地球を救った英雄だ。しかし、その代償はとても大きかった。

「先輩方いままで見守っていただいてありがとうございました！・・・じゃあねみんな！」

彼女は踵を返して走り去った。彼女の見ていた所え移すとこんな言葉があった。

『霧島朱莉
透柄尚弥
永瀬鏡花
不知火焔華
稲葉威兎
桜井遥翔
ここで眠る』

そう。かつて一緒に戦っていた仲間はもうこの世にいないのだ。

彼女は生きる糧を失っていた。それも、自殺をする勢いで。しかし、世間が、国が、世界が彼女をそれを許さない。そのため、英雄となった。然らば、あの手紙が来るのも必

然的に道理だと頷ける。そして、彼女はその手紙を開き、冒頭へと移る。

ＹＥＳ！黒ウサギが呼びました！ファーストコンタクト

－ｓａｉｄ　ｅｉｊｉ　ｏｎ－

「っしゃあ！」
「ヤハハ」
「わっ」
「きゃ！」
「えっ!?」
「はい？」
『お～嬢～！た～す～け～て～！』
さて、やりますか。
「多重影分身の術！」
俺は六人に分身し、ピジョン、ムクホーク、トゲキッス、ファイアロー、オンバーン、リザードンに変身（フォルムチェンジ）して五人と一匹を助けて、湖のほとりに降ろした。

「エイジ。助かりました。」
「いいってことよ。」
原作でヒロインの春日部耀が話しかけてきた。
「・・・・・・ありがとう。三毛猫を助けてくれて」
『おおきに。兄ちゃん』
「どういたしまして」
笑顔で返した。すると顔を真っ赤に染まって俯いてしまった。
「どした？大丈夫か？」
「っ！／／／な、何でもない」
「？そうか」
そのまま俺と距離を置いた。すると、背後から柔らかい２つの感触がした。こんなことをするのは一人しか知らない。しかし、いきなりやられたから、少し上ずってしまった。
「せ、セツノ!?」
「ん～？なあに？」
「離してくれるとありがたいんだけど」
「嫌なの？」

「嫌ってわけじゃないけど、ここじゃなくて別の場所でね」
その言葉を聞いた瞬間、少し笑った気がした。
「分かりました！では二人っきりの時に」
その時、から怒気が襲い掛かってきた。前を向くと我関せずの耀がいたが、その溢れんばかりの怒気が周囲に振りまいていた。俺は思わず声をかけた。
「どうしたの？なんか怒っているようだけど」
「・・・・・・別に怒ってないけど」
すると、怒気が一気に下がった。
「そう。分かった」
俺たちは耀から離れた。それにしてもなんで耀は怒気が出てきたんだろうか？
まぁ、悩んでも仕方ないか。
その理由が分からないなんてやはり鈍感（主人公）か。ここで、もう1人の原作ヒロインの久遠飛鳥が咳払いをしたのであった。
「ちょっといいかしら？」
「ん？ああ、いいぜ」
「私もお礼を言っておくわ。ありがとう」
「どういたしまして」

原作主人公の逆廻十六夜は訝しげながら、話しかけてきた。
「あー、ちょっといいか？」
「おー、いいぜ」
「まずは礼を言っとく。ありがとな」
「ついでだついで。お前一人助けなくてもよかったが、文句を言われたらめんどいと思ったからだよ」
「ヤハハ。そうかついでか」
「ああ、そうだ」
すると、真剣みが増し、十六夜はこんなことを言ってきた。
「なぁ。何でポケモンに変身できるんだ？」
転生者だということをユグドラシルが許可しない限り自らの意識でばらすわけにはできないため、とぼけることにした。
「？どういうことだ？」
「しらばっくれるんじゃねぇ。お前が変身してたもののことだ」
「ああ、そのことか。あれは生まれたときからあってよ今んとこ８０２まで変身できる。そして、変身したお前んとこのポケモン？っていうものの情報が流れ込んできてそいつを使えるようになるっていうものだよ」

十六夜は俺のことをじっと見た後、そうかと言った。
「手間をかけてすまなかったな」
そう言って俺から離れた。・・・危なかった。というか驚いた。まさか、いきなり確信に迫るとは思わなかった。そして、なんかなんで死んだのに生きてるの？みたいな視線を送りまくってる女の子がいるんだが。
「あの、助けてくれてありがとうございます」
「どういたしまして」
「あ、あの貴方は私のことを助けてくれた人ですか？」
「・・・は？」
何を言っているんだ？この子は。さっきのことはもう済んだろ？他に何かあったか？
「すみません。説明不足でしたね。私が十歳の時に助けてくれた人に似ていまして」
なるはど。そういうことか。ってことはこの子が俺が命をとして守った子なのか。だけど、言う訳にはいかないからなぁ。
「ごめんね。俺はそんなことをした覚えはないよ」
「そう、ですか・・・。すみませんこんなこと言って」
「いやいや大丈夫！それ程その人に似てたんだろ？光栄なことだよ」

俺はその場から距離を置いた。

―ｓａｉｄ　ｅｉｊｉ　ｏｆｆ―

―ｓａｉｄ　ｒａｉｋａ　ｏｎ―

私はまたあの人に助けられた。でも、どうして?あの人は死んでしまったわけだし、生きているはずがない。でも、ここは異世界だ。そんなとこもあり得るのかもしれない。そこで私は勇気を出してその人に言ってみた。その結果は否定だった。まぁ、実際当時から5年も経っているわけだし、さらに、私を助ける前の可能性が高いです。だから、そんなことは別に大丈夫です。・・・・・・?です。結構心に来てる。だからってめげはしない!そう思っていたら私から少し距離を置いちゃった。あ、名前、聞いてなかったな。ま、すぐ自己紹介するでしょ。たぶんあの人だと思うし。私は近くの岩に腰かけた。

―ｓａｉｄ　ｒａｉｋａ　ｏｆｆ―

―ｓａｉｄ　ｅｉｊｉ　ｏｎ―

「そういえば、まだ文句を言ってなかったな」
「そうね。仕切り直しましょう」
十六夜と飛鳥が言った。俺とセツノは一先ず傍観することにした。
「信じられないわ！問答無用で引き摺り込んだ挙句、空に放り出すなんて！」
「右に同じだクソッタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜコレ。石の中によびだされた方がまだマシだ」
「・・・・・・・。いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょう？」
「俺は問題ない」
「そう、身勝手ね」
二人はフン、と互いに鼻を鳴らした。その後、我関せず状態だった耀が
「此処・・・・・・どこだろう？」
「さあな。まぁ、さっき助けられたとき世界の果てっぽいのが見えたし、どこぞの大亀の背中じゃないか？」
そこで古代インドの世界地図が出てくるあたりは流石十六夜だなと思う俺であった。後、箱庭で早くギフトゲームしたいな。などと考えてたら自己紹介になっていた。
「お前らに聞きたい。まず間違いないだろうが、一応確認しとくぞ、もしかしてあの手紙が来たのか？」

「そうだけど。まず、〝オマエ〟っていう呼び方を訂正して。――――――――『私は久遠飛鳥よ。以後は気を付けて。それで、そこの猫を抱いた貴女は？」

「・・・・・・・・・・・・・・春日部耀。以下同文」

「そう。よろしく春日部さん。次に岩に腰かけている貴女は？」

「私は絃世来架。以下同文かな」

「よろしく。絃世さん。それでいままで私たちのことを傍観していたあなた方は？」

「じゃあ、私から行きます。私はセツノ・ハイサヒンです。以下同文です」

すると、徐に耀がセツノに近づいた。

「・・・・・・負けないから」

「頑張ってください」

笑顔で言った。二人の後ろから何かメラメラと燃えてるような気がするけど、大丈夫だろ。っと次は俺か。

「次は俺だな。俺は森野叡士。俺も右に同じ。後、俺の独断と偏見で見ることになるが、面白い事が大好きな男だ。セツノはもちろん。他の人たちもなかなか面白いな。特に君とかな」

俺は十六夜に向けながら言った。

「そりゃあどうも」

「よろしく。ハイサヒンさん」
「言いにくいから、セツノでいいですよ？」
「ありがとう。セツノさん。よろしく。森野君」
「俺も叡士でいいよ」
「分かったわ。叡士君。最後に、野蛮で凶暴そうなそこの貴方は？」
「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快楽主義者と三拍子そろったダメ人間なので用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様」
「そう。取扱説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」
「なら、俺が観察して作ってやるよ」
「ヤハハ。マジかよ。じゃ、よろしく頼む、叡士。ってなわけで覚悟しとけ、お嬢様」
その様子を物陰から見ていた人物は思わず呟く。
「うわぁ・・・・・・なんか問題児ばかりですね・・・・・・」

少し経ったところで十六夜が苛立ち気に言う。
「で、呼び出されたのはいいけど何で誰もいないんだよ。この状況だと、招待状に書かれていた箱庭というもののせつめいを人間が現れるもんじゃないのか？」

「そうね。何の説明もなければ動きようがないもの」
「そうだね。早く来ないかな～」
「・・・・・・この状況に対して落ち着き過ぎているのもどうかと思うけど」
「耀もな」
「！今、な、名前・・・！」
「あー、嫌だった？俺、基本的に人のこと名前呼びだからさ、嫌なら苗字にするけど？」
「・・・別に嫌じゃないからいい」
耀はそっぽを向きながら言った。
「そうか。分かった」
「それはエイジもですよ」
（全くです）
物陰に隠れている人物は内心ツッコミを入れた。実は、出るつもりだったが、出てくるタイミングを見失い、物陰に隠れていた。
（・・・仕方ないです。これ以上不満を蓄積させないためにもお腹を括りますか）
これ以上待たせると出てきたときに何をされるか分からないので、出ようと思ったところで、十六夜がため息交じりに呟く。
「仕方ねえ。そこに隠れている奴に聞いてみるか？」

隠れていた人物は心臓を掴まれたように飛び跳ねた。
「なんだ。貴方も気付いていたの？」
「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ？春日部たちも気付いてたんだろ？」
「風上に立たれれば嫌でも分かる」
「バレバレだったしね」
「あんなん隠れた内に入らんだろ。なぁ？」
「はい。そうですね。見つけて下さいって言っているようなものですから」
「・・・・・・面白いなお前等」
めちゃくちゃ目が輝いてるんが。内心苦笑する俺だった。しかし、切り替え早ぇな。もう物陰に隠れている人物に冷たい目放ってるな。ふと、他の人も見ると、俺以外が冷たい目で見てるな。だから、俺も冷たい目で見てみた。面白そうだからな。
「や、やだなあ皆様方そんな狼みたいに怖い顔で見られると黒ウサギは死んじゃいますよ？ええ、ええ、古来より孤独と狼は黒ウサギの天敵でございます。そんな黒ウサギの脆弱な心臓に免じてここはひとつ穏便に御話を聞いていただけたら嬉しいでございますヨ？」
「断る」
「却下」

「お断りします」
「ダメだね」
「聞けませんね」
「無理」
「あっは♪取り付く島もないですね♪」
バンザーイ！と降参のポーズをとる黒ウサギ。しかし、その眼は冷静に三人のことを値踏みしてた。
（肝っ玉は及第点。この状況でＮＯと言える勝気は買いです。まぁ、扱いにくいのが難点ですけど）
黒ウサギはおどけつつも、六人とどう付き合うか思案していて背後から忍び寄る耀には気が付かなかった。
「えい」
「フギャァァ！」
力いっぱいにうさ耳を引っ張った。
「ちょ、ちょっとお待ちを！触るまでなら黙って受け入れますが、まさか初対面で黒ウサギの素敵耳を引き抜きにかかるとはいったいどういう了見ですか!?」
「好奇心のなせる業」

「自由にも程があります！」
「へぇ？このうさ耳って本物なのか？」
今度は十六夜が右から摑んで引っ張る。
「・・・・・・。じゃあ、私も」
「私も！」
セツノが行きたそうに目を輝かせている。内心苦笑した俺は行くように促した。
「セツノがやりたい様にすればいいんだよ」
「では、行ってきます！」
「あ、あの黒ウサギを助けてくれないんですか？温かい目（そんな目）で見ないで助けてください！」
だが、俺は暖かい目で見守る。
「っ――――――――」
声にならない悲鳴が森中に響いた。１時間後に黒ウサギは揉みくちゃにされて息が上がっていた。
「ハァ、ハァ。あ、あり得ない。あり得ないことなのですよ。まさか話を聞いてもらうために小１時間も時間を浪費してしまうとは。学級崩壊というものはきっとこのような状況のことを言うに違いないです」

「いいからさっさと進めろ」
黒ウサギは気を取り直して咳払いをし、両手を広げて、
「それではいいですか？皆様方。定例文で言いますよ？言いますよ？さぁ、言います！ようこそ！『箱庭の世界』へ！我々は皆様方にギフトを与えられた者たちだけが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼントさせていただこうと思い召喚致しました！」
「ギフトゲーム？」
「そうです！既に気付いていらっしゃるだろうとは思いますが、皆様方は普通の人ではありません。その特異な力は様々な者たちから与えられた恩恵でございます。『ギフトゲーム』はその〝恩恵〟を用いて競い合う為のゲーム。そして、この箱庭の世界は強大な力を持つギフト保持者がオモシロオカシク生活できる為に作られたステージなのでございますよ！」
飛鳥は質問するために挙手をした。
「まず、初歩的な質問をしてもいい？貴女の言う〝我々〟って貴女を含めた誰かなの？」
「ＹＡＳ！異世界から召喚されたギフト保持者は箱庭で生活するにあたって、沢山ある〝コミュニティ〟に必ず属していただきます♪」

「嫌だね」
「パス」
「属していただきます！そして、『ギフトゲーム』の勝者はゲームの？主催者（ホスト）〟が提示したゲットできるというとてもシンプルな構造となっております」
「・・・・・・？主催者って誰？」
「様々ですね。修羅神仏が試練として開催するゲームもあれば、コミュニティの力を誇示するために独自開催するところもあります。特徴といたしましては、前者は自由参加で難解かつ凶悪なゲームが多いです。しかし、勝てば場合によって新たな？恩恵（ギフト）〟を手に入れるのも夢ではありません。後者参加する際にチップが必要な場合があります。参加者が敗退した場合それら総てが？主催者〟のコミュニティに寄贈されるシステムです」
「後者はちょっとアレだね。・・・・・・チップには何を？」
「それも様々ですね。金品や物、ペットはたまた一個人でさえチップになりえます。もしもギフトをかけた『ギフトゲーム』をして負けた場合当然――――――自身のギフトを失うことになりますのであしからず」
黒ウサギはその裏に影が見えるような笑顔で言う。その挑発とも取れる笑顔に同じく挑発的な声音で来架は言う。

「そうなんだ。じゃあさ、最後にも一つだけいいかな？」
「どうぞどうぞ♪」
「ゲームそのものはどうやったら始められるの？」
「コミュニティ同士のゲームを除けばそれぞれの期日内に登録していただければＯＫ！商店街のお店で小規模なゲームをやっておりますので良かったら参加していってくださいな」
その言葉にセツノが反応した。
「えっと、つまり、『ギフトゲーム』はこの世界の法そのものってことなのですか？」
「フフン、中々鋭いですね。しかし残念。それでは正解の八割といったところでしょうか。我々の世界でも強盗や窃盗は禁止ですし、金品による物々交換もございます。ギフトを用いた犯罪などもってのほか！そんな不逞な輩は悉く処罰します――――――――――が、しかし！『ギフトゲーム』の本質というのは全くの逆！一方の勝者だけがすべてを手にすることができるシステムです。店頭に置かれている商品もお店に提示している『ギフトゲーム』をクリアすればタダでその商品をゲットすることが可能だということですね」
「そうですか。中々野蛮ですね」
「ごもっとも。しかし？主催者〟はすべて自己責任でゲームを開催しています。つま

り、奪われるのが嫌な腰抜けは初めからゲームに参加しなければいい話なのであります」

黒ウサギは一枚の封書を取り出してこう言った。

「さて、皆様方を召喚いたした黒ウサギにはこの箱庭の世界の質問には何でも答える義務がございます。しかし、その質問を今ここで消化するのにいささか時間を有するため、ここからは我らのコミュニティにて話させていただきますが――――――よろしいですか？」

「待てよ黒ウサギ。まだ俺が質問してないだろ？」

十六夜から威圧が放たれている。ま、俺やセツノからして見ればまだまだ未熟だなと思っているが。黒ウサギはビビったのか少し顔が強張っていた。黒ウサギは聞き返した。

「どういった質問ですか？ルールですか？それともゲームそのものですか？」

「そう焦るな黒ウサギ。俺の質問は後でもいいが、叡士は質問いいのか？」

「ああ、俺はもう大丈夫だ」

「ヤハハ。そうか。俺の質問だが」

十六夜は面白い玩具を見つけたような顔をしたが、すぐに威圧を放ちながら話した。

「黒ウサギの言うことはどうでもいい。腹の底からどうでもいいぜ。俺の質問たった

一つ。この手紙に書いてあったことだけだ」
十六夜はすべてを見下すような視線で一言。
「この世界は面白いか？」
五人は待った。それもそのはず、手紙には『家族を友人を財産を、世界の全てを捨てて箱庭に来い』と。それに見合うものがあるかどうかこそこの六人にとって重要な事だった。
「――――――――ＹＥＳ♪『ギフトゲーム』は人を超えた者たちが集う神魔（ま）の遊戯。箱庭の世界は外界の世界よりも格段に面白いと、黒ウサギは補償いたしますよ」
俺たちは皆笑った。

偽りの魔女

ｌｓａｉｄ　ｅｉｊｉ　ｏｎｌ

七人と一匹で街に向かって歩いていると十六夜が提案してきた。

「なあ叡士、世界の果てに行ってみないか？」

これは・・・。めちゃくちゃ面白そうな案件だな。断る理由もないし行くか。

「いいぜ！面白そうだしな」

「分かってるじゃねぇか。というわけでお嬢様、このことは内密に頼むぜ」

「分かったわ」

「そっちに影分身の俺を置いておくから、セツノー。後、頼んだぞー」

「分かったー」

「じゃ、いくわ」

「ついて来いよ？」

「舐めんな」

そういうと俺たちは世界の果てまで走った。その途中の森の中を走っていると不意に十六夜が訪ねてきた。

「なぁ、その力はギフトの賜物か？」
「いや、まだ使ってないぜ。使ってらほとんど一瞬だからな。使ったら、まるで瞬間移動のようだってセツノが言ってたからな」
「へぇ？ってことは使わない状態だと今のが限界か？」
「まだ余力は残しているが競うか？」
「おー、いいねぇ。俺もまだまだ出せるからよ。世界の果てまで競走するか」
「いいぜ。じゃあ、罰ゲームはどうする？」
「んー、そうだなぁ。なら、命令権（首輪）一回ってどうよ」
「乗った。それで行こう」
「じゃあ行くぜ？スタートだ！」
その言葉と同時にギアをあげた俺と十六夜は世界の果てまでほぼ同時だったが、僅かに俺のほうが速かった。そして、そのままゴールした。俺はどや顔で言った。
「俺の勝ちだな」
「ちっ！あ～クソ！手加減されたまま負けた！」
「約束通り命令権（首輪）一回だからな」
「へいへい。で？何を命令するだ？」
「今はまだ保留でいいか？十六夜のギフト分かってないし」

「なら、今からどっかで『ギフトゲーム』でもするか？」
「じゃあ、それが命令で」
「分かった。どうする？」
「そうだなぁ。お！トニトリスの大滝じゃないか！蛇神でもいるかもな」
「そうか。カチコミに行くか」
「じゃあ、俺は見てるから」
「おう、見とけ。行くぜ！おい！蛇神！遊ぼうぜ！」
十六夜は走りながら蛇神に言い放った。
『なんだ騒々しい。人間か。どれ、我が見極めてやろう』
「はっ！何を言ってやがる。俺が試してんだよ」
そう言って拳を蛇神の頭に入れて、蛇神は沈んだ。その様子を森の中で見てた俺はやっぱり十六夜は強いなどと考えながら森の中を進んでいた。
「そろそろ十六夜のところに黒ウサギが来るな。さてと、俺は『ギフトゲーム』でもやりに行こうかな。お？あんなところに洞窟があるじゃないか。行ってみよう！」
俺は走ってその洞窟まで行った。入口に入ると突然白い靄のようなものが俺にまとわりついた。ん～。払ってもいいけど面白そうだしそのままにしとこ。それからすぐに謎のゲートが開いて俺を中に入れた。その中はいろんなものがごちゃ混ぜになった

ような不思議なところだった。
「ここはどこだ？なんかえらくごちゃごちゃしたとこだな。契約書類（ギアスロール）はどこだ？」
あたりを見まわすと一枚の黒い契約書類（ギアスロール）を見つけた。いきなり魔王戦か。面白いな！
「なるほど。魔王か、俺を倒せるかな？」
俺は改めて契約書類（ギアスロール）を見た。

・ギフトゲーム名　ＤＲＥＡＭ　ＯＲ　ＲＥＡＬＩＴＹ
プレイヤー一覧　森野叡士
ホストマスター側　勝利条件
？プレイヤーの屈服及び殺害。
？魔女の殺害
プレイヤー側　勝利条件
？ゲームマスターの討伐。
？現実を発見し、三人の天使の名を記された紙を現実に掲げよ。
？魔女の願いを聞き届けよ。
？上記の条件の全てを達成。

プレイヤー側　敗北条件
？夢の発見。
？プレイヤーの屈服及び死亡。
？勝利条件を満たせなかった場合。
？禁断の果実を食べる。
プレイヤー側　禁止事項
？空間の破壊を禁ず。
？何人たりとも魔女の殺害を禁ず。
（上記のことに違反すると即、プレイヤー側の敗北とみなす。）
宣誓　上記を尊重し、誇りとみ旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

〝プリム・ムリャーリ・イマニティ〟印

「『現実』の発見？どういうことだ？」
俺は疑問を口にしたが、それよりもきついことがある。俺はその一文を読んだ。
「『何人たりとも魔女の殺害を禁ず』か。厳しいな。」
そう。厳しい。なぜなら、魔王から、魔女の殺害を阻止しつつ、魔女の願いを叶えな

きゃならないからな・・・。うん。面白い！やってやろうじゃないか。しかし、分からないことだらけだな。『夢』と『現実』が何を表してるとか『禁断の果実』であるリンゴが出てくるのかとかあるけど、分かるものと言えば主催者（ホスト）のプリム・ムリャーリ・イマニティはラテン語で『人類最初の女性』を表してることくらいか。ふむ。

「人類最初の女性といえばエバ。つまり、イブになるわけだが、そういえばアダムにはイブの前にいた女性がいるって聞いたことがあるな」

「ええそうよ。私が人類最初の女性。つまりね、エバの前の女のリリスよ」

声がする方向に顔を向けるとゴスロリの小悪魔美少女がいた。

「ああ、サタン（とその他大勢）の嫁（のビッチババア）か」

「なんとなくディスられた気がするけどまぁいいわ。私との『魔王のギフトゲーム』の開始よ？」

そう言って姿が消えて代わりに3つの扉が出現した。その扉はそれぞれ右から赤、黄色、緑の順に並べられて、左から偽りの魔女、星読みの魔女、憤怒の魔女の順にプレートが掛けられている。その前には1つの立札があり、その立札には『魔女の願いを左から順に叶えよ』と書かれてあった。

「まずは偽りの魔女か」

そして俺は偽りの魔女のプレートが掛けられている緑の扉を開けて中に入った。中

に入ったら、扉がスーッと消えていった。
「なるほど。そういう仕様か」
俺は辺りを見渡した。それは、一面真っ白の部屋だった。そして、そこに1つの立札が現れた。そこにはこう書かれてあった。
『私の本当の姿を当てよ』か。これは楽勝じゃね？」
「本当にそうかな？」
振り返ると、金髪ロングで長身の巨乳美少女が現れた。
「君は？」
「ボクかい？ボクは偽りの魔女のシオンだよ。よろしくね？」
「よろしくしたいが、さっさとこの『ギフトゲーム』から出たいんだ。悪いな。それで？あの立札に書かれてあったことはどういうことだ？」
「いや～。実はね、自分の本当の姿が分からなくなっちゃったから探してもらおうと思って」
「おい、蜂谷三郎みたいに言うな！」
「？誰それ？」
「いや、何でもない」
アニメじゃ自分の顔を忘れて一番しっくりくる不破雷蔵の顔にしてるって言ってた

よな。などと考えているとシオンが話し始めていた。

「ま、いいけど。じゃあ、二万人の『ボク』の中から本当の『ボク』を見つけてね」

そう言って姿が消えて二万人の人がＦａｔｅ／Ａｐｏｃｒｙｐｈａに出てくるホムンクルス培養器のようなものの中に服を着た状態で現れた。俺はとりあえず、二万人の人を見てきた。見たところ全員女の子に見えるが、分からないので『白眼』を発動して観てみた。すると、一人だけ男の娘がいた。男の子ではなく、男の娘だ。これを間違ってはいけない。冗談はさておき、男の娘は除外かな。だって、あの魔女、女の子だったし、全然似てないし。それから俺は『写輪眼』を発動し実体があるかどうか観てみた。・・・全員、実体があった。正直言って『写輪眼』があれば、何とかなるだろって思っていたが・・・、『永遠の万華鏡写輪眼』にでも進化しますかな。ま、そこまでしなくてもいいか。

「ん～。どうするかな」

クソっ。全然分からねぇ。ヒントも何もないのに二万人の中からどうやって探すか。たぶん、シオンに似ているやつを探すのがいいのか?。それから1時間以上掛けて調べた結果、六人が残った。

「うん。これ以上は分からん」

クソっ何かヒントになるようなものは無いのかよ。そもそも偽りの魔女ってなんだ

よ！・・・・・・ん？今、なんか引っかかったぞ？偽りの魔女・・・。偽り・・・。ッ！そうか！分かった！全て偽りだったのか！今までの苦労が水の泡じゃねぇか！俺はすぐさまあの男の娘のがある場所を見ると、リリスが容器を破壊して殺そうとしていた。俺は瞬身の術を使って男の娘が入っている容器の前まで跳んでリリスの攻撃を防いだ。

「なにっ！」

「間に合ったか。行くぞリリス！白竜の咆哮!!」

「ッ！竜の御技!?きゃあぁぁ!!・・・もうっ！ここは引いてあげるわ」

そう言ってリリスはどこかに出かけるような雰囲気で消えていった。ふ～。何とかなったか。さてと、魔女を起こしますか。俺は容器にある解除ボタンを押した。すると、中の液体が流れ出てシオンが目覚めた。

「正解だよ！オニーサン！リリスから攻撃を守ってくれてありがと。でも、よく分かったね。どうして分かったの？オニーサン」

「最初は魔女の願い自体が偽りなんじゃないかと思ってたんだ。けど、流石にそれはないだろうと思ってその考えを止めたけど。で、二万人の中に一人だけ男の娘がいるのが分かってさ。違うだろって思ってたけど気になってマーキングしてたんだ。そのおかげでリリスから攻撃を防げたんだよね」

「うん！ありがとね。オニーサン！」
「どういたしまして。で、話を戻すとして、ヒントがないことが一番気がかりだったけど、一旦置いてあの時のシオンに似ている娘を探して六人まで絞ったんだ。けれど、それ以上分からなくて、なんとなく偽りの魔女って心の中で言ったら、なんか引っかかってさ、特に偽りの部分で引っかかって気付いてたんだよ。あの時の容姿が偽っていたことにね。だから、性別すら違う男の娘がシオンだと分かったんだ」
「なるほどねー。うん！魔女（ボク）の願いが達成されたよ。だから、はい。これ」
ラテン語で偽りの文字が彫られた金のバッチをもらった。
「これは？」
「これは魔女の願いを叶えた証だよ。後二つ貰うと『夢』と『現実』が現れるから、頑張ってね」
「ありがとう。あ、二つ質問があるんだけどいいかな？」
「いいよ！」
「まずは、この女の子達は何なのかな？」
「ああ、この娘達はね『ギフトゲーム』に負けた娘達だよ。あ、死んではいないから安心してね」
「そうか」

やっぱりか。なんとなくそうだとは思っていたから驚きはなかった。
「あれ？そんなに驚いてないんだね。もしかして、予想してた？」
「まあな。ついでに、男の方はどうなっているか知りたいけどね。ま、これは二つ目の質問じゃないから答えなくてもいいけど」
「ううん。大丈夫だよ。男の子はね星読みの魔女と憤怒の魔女に均等ってわけじゃないけど、配分されてるんだ。後、リリスにも。というかリリスの方に大部分がいるけどね」
「なるほど。流石ビッチ。抜かりないねー」
「あははは！面白いね！」
「そう？」
「うん！今までの人はそんなこと言ってた人いなかったから面白い！」
「それは良かった。それで、二つ目の質問なんだけど今までに君の願いを叶えた人はいるの？」
「いるよ。百人くらいかな？だけど、全員次の星読みの魔女のところで願いを叶えられなかったんだよね」
「ありがとう。じゃあ、俺は先に進むよ」
「分かった！なら、後ろにある青い扉から入ってね。さっきの場所に戻るから」

後ろを振り向くといつの間にか青い扉が出現していた。
「分かった。じゃあな、また会おう！」
「うん！またね！」
それを聞いてから俺は青い扉に入っていった。

星読みの魔女

―ｓａｉｄ　ｅｉｊｉ　ｏｎ―

俺はスタート地点に戻った。そして、三つの扉を見ると『偽りの魔女』と書かれてあったプレートが掛けられてある緑の扉に『ＣＬＥＡＲ』の文字が扉の中心に彫られてあった。他に二つには何も彫られてなかった。

「なるほど。クリアしたらこういう感じになるのか。じゃあ、星読みの魔女のところに行くか」

そいえば、星読みってことは俺の前世ことが分かったりするのかな？分かれば抜け落ちている記憶が分かるかもしれないな。まあ、一旦それは置いといて、お願いは何になるんだろ？まさか、自分が見えてる未来を覆して見せてなんてお願いだったらきついな。まだ、イザナミが使えないというか使いたくないからな。ま、書き換え能力（リライト）使えば元に戻るけど、まだ必要ないか。そう思って俺は星読みの魔女の扉を開けて奥に入った。

「偽りの魔女のところとは違う感じだな。星読みの魔女だから満天の星空なのかな？」

凄いよね～。面白いよね床まで星が見えるだなんて。まるで――――――――宇宙の中にいるみたいだなぁ。そう、この部屋はまるで宇宙にでも行っているかのような部屋だった。

「ええ、そうなのよ。一つサービスするとね、わたしは星が見えれば見えるほど力が増していくのよ」

「ということは、この部屋にある星々は全部本物・・・。要するに、宇宙空間ってことになるのか？」

「ええ、そうなのよ」

「じゃあ、なんで俺は息ができてるんだ？」

その答えに対して疑問だったことを質問した。

「それは、縦、横、高さが全て１０ｋｍ四方の正方形の結界をを張る機械を作ったからなのよ」

「なるほどな。そういえば、君の名前は聞いてなかったな」

「そう言えば言ってなかったなのよ。わたしの名前はステラ。星読みの魔女なのよ。じゃあ、そろそろ魔女（わたし）のお願いを叶えて欲しいのよ」

そう言う彼女は綺麗な顔をした白髪のショートボブ。首から下は黒っぽいローブを着ていて体形がよく分からないが、魔女（この娘）のお願いを叶えなきゃならないから、そのお願

いを聞いた。
「分かった。君の願いは何？」
「わたしの願いはギフトを使わずにわたしの星読みで知った未来を覆すことなのよ」
マジか～！さっき思ってたことがフラグってたか。さらに、よりきつくなってきてるし。でも、面白いからありだな。
「分かった。それで、どうやって判定するんだ？」
自己判定だったら嘘をつく可能性があるから聞かないとな。ましては、このお願い自体は『ギフトゲーム』じゃないんだし。それに、面白くないしな。ただし、『力』の勝負なら別だけど。
「それについては大丈夫なのよ。この『ギフトゲーム』で敗北した月の兎がいるから、それに判定させるなのよ」
「なるほど。で、具体的には何をするんだ？」
「そうね。ポーカーなんてどうなのよ？」
「マジで？」
俺はタイムラグ無しで答えた。それにステラは若干引きぎみで返答した。
「冗談なのよ」
じょ、冗談か。びっくりした・・・。もしそうだったら少し、いや、大分厳しかった。

だって、ポーカーが無茶苦茶弱くて絶対未来を覆せない！（確信）

「う～ん。なら具象化しりとりだったらどうなのよ？」

「具象化しりとり？」

「具象化しりとりっていうのはね、下界にあるとある小説の中に登場するゲームの名前で字のごとく具象化するしりとりなのよ。無いものは出てきて、在るものは消えるしりとりなのよ。ルールは簡単。『先に使った言葉は禁止』、『３０秒以上答えない』、『継続不能』。この三つが小説の中で書かれていたことなのよ。それで、その小説では実在しないもの、架空のもの、イメージできてないものは具象化できないことになっているのよ。だけど、オリジナルとして実在しないものでも架空のものであれば良しとするなのよ」

「ということは、大体はノー○ーム・ノーラ○フの感じでいいんだな？」

「そうなのよ。そして、具象化しりとりをするための機械があれなのよ」

ステラが指を指した方向を見るとＦａｔｅのの聖杯の形をしたものの上に蒼白い光の球体が浮いているといったような俺の倍くらいある大きさの機械があった。

「凄いな。この機械で具象化しりとりをするのか」

「そうなのよ。これが具象化しりとりをする『おわんくん１号』なのよ！」

「名前!!」

名前ダサっ!!いや、マジで。この機械で具象化しりとりができるのは凄いし、形もまぁまぁいいからいいけど、名前だけ、マジで名前だけどうにかならなかったのかな～。
「いや～。それ程でもなのよ／／／」
「褒めてないし、照れるな!!」
褒めてないから。照れるな。ちょっとかわいいけど!…茶番は終わらせるべきか?いや、面白いから続けるか!
「いいじゃないなのよ!わたしは褒められたいなのよ」
「子どもか!」
「わたし、十一歳なのよ!」
「子どもだった!?」
「嘘なのよ。ホントは百歳以降数えてないから分からないなのよ」
「ば、ババａ「えいなのよ」ブハァ!」
いきなり殴られた。
「な、何を!」
「女性にそんなことは聞いてはいけないなのよ?そんなことを言ったらブツなのよ?」
めっちゃいい笑顔だった。だけど、後ろから黒いオーラがゴゴゴゴゴゴゴゴ!!!!!!ていう感

じに迫て来た。俺は何か危機を感じて何言ったか覚えてないけど何か言った。
「い、いや、もうブッてるし・・・」
「言い訳は無用なのよ!」
「は、はい!」
とまあ、こんな茶番が数分間続いた。
「そろそろゲームに入らないか?」
「はいなのよ。でも、その前に、星読みと審判役の月の兎の紹介をするなのよ」
「そうだな。じゃあ、やってくれ」
「オーケーなのよ」
あ、そういえばこのゲームでステラが死んだら、契約書類(ギアスロール)に反映するのか?聞いてみるか。
「なあ。ステラ。ちょっと聞きたいことがあるんだ。」
「何なのよ」
「このゲームでステラが死んだら、契約書類(ギアスロール)に反映されるのか?」
「反映はしないなのよ。ついでに言うと、ギフトの使用はゲームが終わった直後からできるなのよ」
お、マジかそれならリリスが現れた時にも対応することができるな。

「悪いな。聞きたいことは聞けたから続きをどうぞ」
「分かったなのよ」
ステラが目を閉じて少ししたら紫がかった波紋が広がっていき、徐々に星々の煌めきが増えていった。要するに、星の光の輝きが強くなったのだ。
「こ、これは・・・」
「これは、星読みに欠かせない儀式です」
「儀式・・・これが・・・。それで君は？」
「ああ、申し訳ございません。私は月の兎が一人の朔でございます」
「そうか。君が月の兎か。じゃあ、朔って呼んでもいいか？」
「かまいません」
俺はあることを聞いた。
「そうだ。朔、黒ウサギって知ってるか？」
「おお！私の同胞をご存じでございますか！」
「ああ、今は俺たちのコミュニティにいるよ」
「本当でございますか？」
「本当だ」
「それはおかしいです。帝釈天様が絶対に許さないでしょうから」

「でも、俺が聞いた話だと黒ウサギのコミュニティは壊滅して、黒ウサギが唯一の月の兎の生き残りだって聞いたけど」
「それはないですね。私のコミュニティは三桁の外門にあります。そうやすやすと私のコミュニティが壊滅するはずがありません！」
「そんなことを言われても、俺はこの箱庭の世界に召喚されたばかりの人間だから、その辺のことは分からないんだよ」
本当に知らないしな。いや、マジで。原作だと魔王によって壊滅したことくらいしか書かれてなかったし。
「申し訳ございません。とんだ失礼をいたしました」
「いや、大丈夫だ。ところで、もうすぐ終わりそうだな」
「はい。その通りでございます。後、十数秒で完了します」
程なくして儀式が終わったとされるステラがこっちに来た。
「結果はどんな感じ？」
「結果はまぁ、細かなところは省くけど、端的に言うとわたしの勝ちなのよ」
「ということは、それを覆せばいいってことだな？」
「そういうことなのよ！」
「その細かな部分に関しましてはこの朔が審判員として責任をもって判断させて頂き

ます」

「分かった。それで？まぁ、ゲームを開始したいところだけど狭すぎなんだよな。だって、このゲームは空間には作用しないんだからさ。移動しない？」

「分かったなのよ。なら、月に飛んで月全体を結界で閉じ込めるなのよ！この『結界君２８号』で！なのよ」

やっぱ、名前がクソダサい！さらに何故か微妙に鉄人２８号に被ってるし！いや、まぁ、２８号の部分はたまたま何だろうけど。

「分かった。そこでやろう」

「よーし！やるなのよ。はあああぁぁぁ!!」

そして、俺たちは月に到着した。

「じゃあ、ついて早々だけどやりますか。それで、最初はどうする？」

「最初は挑戦者からなのよ」

俺は架空のものが本当に大丈夫か確かめるためにある言葉を発した。

「なら、最初は・・・〝波動砲（はどうほう）〟」

すると、どこからともなく現れた戦艦がステラに向かって波動砲を放った。しかし、ステラに直撃する寸前に彼女は答えていた。

「ＦＦ１１から〝ウォール（うぉーる）〟なのよ」

どこからか大きな壁が出てきて、波動砲を防いだ。
「なるほど。作品名を言ってから架空のものを言うと、その通りの姿になるってことか？」
「そんなことはないのよ。頭の中のイメージで構成されていくものだから、言っても言わなくても変わらないのよ。強いて言えば、読者への配分なのよ」
「？読者への配分？なんだそれは？」
「分からないなら別に大丈夫なのよ。まあ、できればつけて欲しいのよ」
と言うステラのメタ発言が炸裂した。
「分かった。何かつけなきゃいけない気がするしな」
そして、ステラが次の言葉を言うように促してきた。
「次はお前の番なのよ」
「そうだな。じゃあ、ポケモンで〝ルンパッパ〔るんぱっぱ〕〟」
ボンッと言う音と共にルンパッパが鳴き声を出しながら出てきた。
「ルンパ！」
ルンパッパが仲間になりたそうにこっちを見ている。仲間にしますか？
→はい　　いいえ
はい　　→いいえ

↓はい　　いいえ

叡士は「はい」を選んだ。ルンパッパが仲間になった！

「森野叡士!!」

俺はいきなり呼ばれてビックリしてしまった。

「な、何・・・？」

「何って、私が言いたいことなのよ。お前の番なのにぼーっとしているからなのよ」

「悪い悪い。それで、次の文字は？」

「上を見るなのよ」

その言葉に上を見ると伝説のポケモンパルキ『ア』がいた。

「なるほど・・・。なら、不思議の国アリスから〝アリス（あり『す』）〟」

ボンッと言う音と共に不思議の国のアリスの主人公のアリスが出てきた。

「キャッ！・・・？ここはどこ？それに貴方たちは？」

イメージした格好ではあるけど、何か全然違う感じのアリスが出てきた!?

「お、おいステラさんよ。なんか思ってたのと違う感じのものが出てきたぞ。一体どうなってんだ？」

「それは、私にも分からないなのよ。」

「なら、しりとりを続けて『ふ』になったら、『不思議の国のアリス』って答えれば消

えるはずだし、そこまで進めようぜ」
「分かったなのよ。なら、ドラ○ンボール超(スーパー)から〝スーパードラゴンボール一星球(ぼーるいーしんちゅう)〟なのよ」
すると、惑星（といっても太陽の約三倍の大きさ）くらいの大きさのドラゴンボールが出現した。
「スーパードラゴンボールはアニメで見たときも大きいとは思っていたけど、やっぱ、実際に見ると違うね」
だって、大きすぎて表面のオレンジ色の一部分しか見えないしな。その間、アリス以外の架空のものたちは反応がなかったが、アリスだけは「ふ、ふぇ・・・」などと言って腰を抜かしている。仕方が無いのでアリスを自分の近くに呼んだ。
「おい、君。こっちに来たほうが安全だよ?」
「わ、分かりました」
アリスはテトテト歩いて俺の横に来た。そして涙目でこう言った。
「わ、私のこと、守ってください！」
「よし、任せろ！」
即答だった。それもそのはず、この『箱庭』に飛ばされる前は園で子どもたちの相手をしていたのは専(もっぱ)ら叡士だった。なぜなら、影分身を使って子どもたちの子守やアルバ

イトに行っていたからだ。（本体はセツノといちゃつくために学校に行っていた。）要するに、子どもが好きなのだ。

＊＊＊＊

それから数時間が経過した。数時間の間にいろんなことがあった。『不思議の国のアリス』の言葉を言ったのにアリスが消えなかったことがあった。それに、キャラクターばかりになって鬱陶しくなったから、『キャラクター』って言葉を言って今度こそはと思ったけれど消えていなかった。さらに、アリス以外にもいくつか残っているキャラがいるし、本物でも混じっているのか？んー、本当にどうなってんだろうなあ。後、場所も目まぐるしく変わっていったな。ある部屋の一角から別宇宙の星まで様々だ。それで、今は火星のアキダリア平原のど真ん中で椅子に座ってる。うーん。そろそろ限界だな。退屈過ぎる。終わらせるか？ま、その前にリリスをどうにかするのが先なんだがな。でもなー、候補はいくつかいるんだが、まだ、絞りきれてはないんだよな。

「どうするか・・・」

「どうするって次はお前の番なのよ」
「そうですよ。お兄さん」
ステラとアリスがジト目で言ってきた。
「ごめんごめん。確か『せ』だったよな？じゃあ、セニョリータ（『た』）」
すると、一匹の小魚がピチピチという音を立てて出てきた。
「へ～！そんな名前のお魚もあるんですね。ね、お姉さん！」
「ホントなのよ」
「まあな。この魚は地球上に実際に存在する魚でアメリカ合衆国のカリフォルニア州からバハカリフォルニアにかけて生息しているベラ科の仲間。水深２３ｍほどまでの沿岸域に主にみられ、ジャイアントケルプや他の海藻から成る藻場、岩礁域などに生息している。小さな群れをつくり、中層をよく泳ぎ回る。小型の底棲生物を餌とするほか、クリーナーとして他の魚の体表に付いた寄生虫を食べることもあるっていう魚。解説臭くなったが、気にしないでくれ。昔、適当に検索したら出てきて、びっくりしたんだよな」
「ふ～ん。なるほどなのよ。なら、タルボザウルス（『す』）なのよ」
すると、何もない所からタルボザウルスが現れて俺のことを食おうとしやがった。だから俺は、素早く奴（タルボザウルス）足元に接近し奴（タルボザウルス）の足を思いっきり蹴ってやった。すると、

奴(タルボザウルス)は倒れて起き上がれなくなった。具体的に言えば、必死になって起き上がろうとするけど、前足が小さいからなのか起き上がれてはいない。

・・・・・・こんなもんか。奴(タルボザウルス)というか主に肉食恐竜と呼ばれる恐竜は一度転ぶとそのまま死んでしまったなんてことが結構あったらしい。

「すごい！すごいです！お兄さん！」

と言う賞賛と同時にピョンピョンと飛び跳ねているアリスの姿があった。正直言ってチョー可愛い！

「まあな」

俺は内心そんなことを思っていたが口に出さなかった。もちろん顔にも。だって、嫌われたくないしな！まあ、今はそのことは置いておいてさっさと負かしますか。

「俺の番だな。水酸化ナトリウム(すいさんかなとりうむ)」

すると、テーブルの上に結晶化した水酸化ナトリウムが現れた。その後、すぐにステラが返した。俺もすぐに返して、気づいたら2時間以上経っていた・・・。アリスのはいつの間にか俺の腕に抱きついて寝ていた。

「う～ん。やり過ぎたな。終わらせるか」

「やってみるがいいなのよ！」

「じゃあ、行くぞ？魔法科高校の劣等生から分解(ぶんかい)」

「へっ？」
ステラはいきなりのことで戸惑いが隠せなかった様で訳も分からないような声を上げて分解された。
「このゲームの勝者は森野叡士！」
今まで空気だった審判の朔が高らかと宣言した。同時に全てのものが元に戻り俺とステラは元の位置で再開した。けれど、何故かアリスだけが元の戻らずに俺の腕に抱き着いたまま寝ている。アリスの正体がリリスではないのはすでに確認済みなので問題はない。だが、おかしいとは感じてはいた。けれども、そのことは一瞬でリリスの警戒に変わった。なぜなら、すでにリリスがいるからだ。《いた》ではなく、《いる》。つまり、現在進行形で結界の中に潜んでいるということである。俺は光のドラゴンフォースを発動しながら、神経を研ぎ澄まし待ち構えている。そして、その時は突然現れた。
「ん？なんだ？この歪み」
朔の背後にいつの間にか歪みが生まれていた。その歪みはだんだんと大きくなり朔を飲み込んで人の形へと変化した。その姿はリリスだった。俺はすぐにリリスに近づき、白竜の咆哮を叩き込んだが手ごたえが無かった。
「どういうことだ？」
煙が晴れるとそこには誰もいなかった。辺りを見回しても誰もいなかった。だけど、

すぐに気が付いた。
「っ!!」
ステラのところを見るとステラの背後に移動し、殺そうとしていた。そんなことはさせない！
「うおぉぉぉぉ!!」
俺は光のごとく移動し、リリスからステラを助け、リリスから離れてところで降ろした。
「な、なんなの!?その速さは!!」
「お前に語る言葉はない！滅竜奥義ホーリーノヴァ！」
「きゃあぁぁぁ!!っ！ここは引いてあげるわ！次こそ私が勝つわ！」
そう言って地に這うリリスは姿を消した。
「な、何があったなのよ」
「お、ステラか、実は・・・。」
俺はゲームが終わった後のことを話した。
「なるほど、ありがとうなのよ。これで、魔女(私)の願いが達成されたなのよ。だから、これを渡すなのよ」
シオンの時と同じ金のバッチをもらった。でも、ひとつだけ違うのは彫られている文

字がラテン語の偽りじゃなくてラテン語の星読みになっていることだ。
「ありがとう。じゃあ、俺はアリスを連れて行くよ」
「分かったなのよ．また、会おうなのよ」
それを聞いてから俺は後ろにあった青い扉に入っていった。